

**P4C実践の試みから見えた
多文化多言語のこどもと大学生の変容
—複数言語を活用してこどもの「声」を傾聴する活動を通して—**

子どもの日本語教育研究会

川田麻記（桜美林大学） 上原みなみ（桜美林大学学生）

※ 本実践は、報告者2名と桜美林大学学生の大神茉莉、徐子恒、
そしてその他8名の学生による取組に基づく。

2026年2月28日
実践発表7

実践の背景

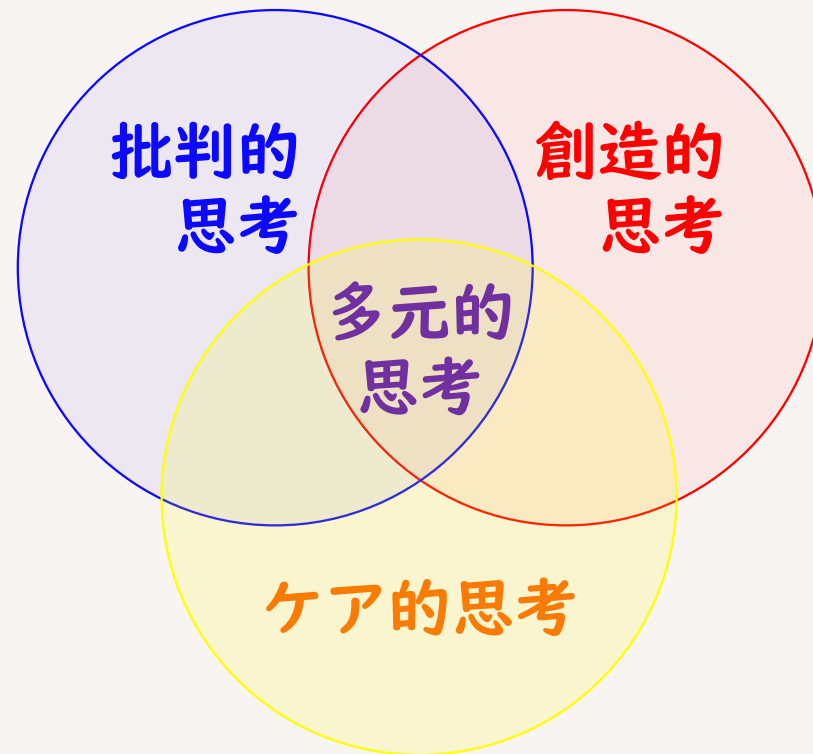
- 「こども（のため）の哲学」 Philosophy for/with Children（通称P4C）

答えのない問いに対し、こどもたちが対話を通してじっくり考え、自己と世界の見方を深く豊かにしていく言語活動

- 1920年代にドイツで萌芽し、その後、1970年代に米国の哲学者マシュー・リップマンによる省察的教育実践（The Reflective Model of Educational Practice）として広まり、世界各地で展開されている。

河野（2021）、リップマン（2014）

教育実践の中で育成されるべき最も重要な思考の側面



(リップマン 2014, p.290)

価値語の3語群 (リップマン 2014, p.201)

ケア的思考は、情動的思考の典型である (p.200)

表1

| | 批判的思考 | 創造的思考 | ケア的思考 |
|---------------------|---|--|---|
| <p>価値語の3語群 (一部)</p> | <p>relevance (関連性がある) logical (論理的な) ingenious (独創的な) methodical (体系的な/手順に沿った) witty (機知に富む) consistency (一貫性) self-controlled (自制的な) clever (賢い/要領がよい) sensible (分別のある) prudent (慎重な) cautious (用心深い) lucid (明晰な) skeptical (懐疑的な)</p> | <p>ingenious (独創的な) witty (機知に富む) imaginative (想像力豊かな) clever (賢い/巧みな) inventive (発明的な) wise (賢明な) appreciative (価値を見抜く) amusing (面白い) humorous (ユーモアのある) glowing (輝くような)</p> | <p>solicitous (気遣う) vigilant (注意深い) loving (愛情深い) generous (寛大な) giving (与える) pardoning (許す) forgiving (許す/寛容な) liberating (解放する) adoring (敬愛する) enjoying (楽しむ) esteeming (尊重する) approving (承認する) honoring (敬う) respecting (尊敬する) など</p> |

他者の状況や立場を想像し、関わり方を捉え直す思考
 ▶ その判断は誰かの不利益にならないか?

実践の背景

その語彙は、一般的に一つの言語が想定されるが、多文化多言語のこどもにとって、それは一つの言語に限定されない。

- リップマン(2014:196)

「こどもは情動を注意深く扱うことで、自らの生き方を入念に探る」と述べ、その思考のための適切な下地として「情動の語彙の習得」を強調する。

- 文科省(2025)「ことばの力のものさし」

多文化多言語のこどもの教育において、こどものもつ複数の言語資源の活用とその言語実践を、こどもの権利と捉え、それによって立ち現れるこどもの思考過程を重視

「トランスランゲージング(以下、TL)教育論」
(ガルシア他、2024)における「TLスタンス」

本発表の報告

- TL教育論(カルシア他, 2024)に基づき、多文化多言語のこどもを対象に、こどものもつ**複数の言語資源を活用して行ったP4Cの試み**
- このP4C実践に参加したこどもと言語教育を学ぶ学生の変容

TL教育論



P4C

マルチリンガルこども哲学



哲学対話とは…？

問いに対して、互いのちがいを大切にしながら、じっくり考えます。
そして、相手の話を聞き、ゆっくりと自分らしく表現します。

実践の目的

本実践は、TL教育論に基づき、多文化多言語のこどもと言語教育を学ぶ学生がP4CにTLを活用して取り組むことを通して、以下の①②に示す力や視点を養うことをねらいとした。

- ①こどものバイリンガル/マルチリンガル・アイデンティティの形成を支援することで好奇心を喚起し、こどもが安心感をもって粘り強く問い続けようとする力を養う。
- ②学生がTLスタンスを意識化することを通し、こどもの「声」を傾聴するケアの視点を養う。

実践の期間・形態・回数

表2

| | | |
|-------|-----------------------|--|
| 実施期間 | 2025年5月31日～2026年1月31日 | |
| 実施形態 | オンライン | 対面 |
| 1回の時間 | 60分 | 150分 |
| 頻度 | 2週間に1回 | 単発イベントとして |
| | 19回 | 2回 |
| 参加者 | 2名（とその家族） | オンライン参加の家族 多文化多言語の高校生 日本語母語のこどもとその家族 |

対象： こども

表3

| | A | B |
|--------------------|-------------------|-------------------|
| つながりのある国・地域 | アメリカ | アメリカ |
| 言語資源 | 英語>日本語 | 英語=日本語 |
| 年齢 | 8歳 | 9歳 |
| 学年 | 小2 | 小3 |
| 包括的なことばの 発達ステージ | ステージC 順序期 | ステージD 因果期 |
| 日本語習得の ステップ | 聞く・話す<4> 読む<5> | 聞く・話す<5> 読む<5> |

対象： 大学生

表4

| 大学生 | 4年生 | | | 3年生 |
|--|---------------------|---------------------|---------------------|--|
| | U | X | Y | 8名 |
| 多文化多言語の こどものとの関わり (Service-Learning) | 2022年度～現在 (約4年間) | 2023年度～現在 (約3年間) | 2023年度～現在 (約3年間) | 一人を除き 2024-2025年度 ～現在 (約1年-1年 半) |
| 『トランスランゲージング・ クラスルーム』講読 | 2024年度～現在 | 2025年度～現在 | 2024年度～現在 | 2025年度～現在 |
| 「ことばの力のものさし」 理論編・実践編 | 2025年度～現在 | | | |
| P4Cの実践への関わり | 2025年度～現在 | | | |

表5【実践の内容】

| 教材名 | | 問いの例 |
|--|--|--|
| NHK for School 「Q～こどものための哲学とは？」 | かっこういいって例えば？ ふつうってどういうこと？ ウソをつくのは悪いこと？ ルールって必要?, etc. | どんな人がかっこういい？かっこうわるいって？ ふつうって？ふつうじゃないって？ ウソはどんな時、よくなる？ いいルールって？わるいルールって？ |
| 小2国語教科書 上巻『たんぽぽ』下巻『赤とんぼ』 | ミリーのすてきなぼうし, etc. お手紙, etc. | 見えるものと見えないもの、どちらが大事？ かえるくんはどうして手紙を書いたことを、 がまくんに言ったと思う？ |
| ウォーリー (2023) 『もし友だちが ロボットだったら？ 哲学する教室の つくりかた 30の授業プラン』 | アリとキリギリス 王子とブタ カエルとサソリ | やさしいってどういうこと？ 助けるって？ 王子とブタどちらが幸せ？幸せってなに？ しんじるって怖い？もしカエルだったら？ |
| ヨシタケシンスケ (2019) 『なんだろうなんだろう』 | ゆるすってなんだろう？ ゆめってなんだろう？ | ゆるしてあげたいけど、ゆるせないことって、 ある？ ゆるせないって、ダメ？ |
| Shell Silverstein (1998) The Giving Tree シェル・シルバスタイン (著) 村上春樹 (訳) 『おおきな木』 | | 人に「あげる」って、いいこと？ 木は幸せだったのかな？幸せってなに？ |
| えがしらみちこ (2023) 『こどものけんりのほん』 第12条 こどもの意見表明権 | | 意見ってなに？ どんなとき、意見がいえる？いえない？ |

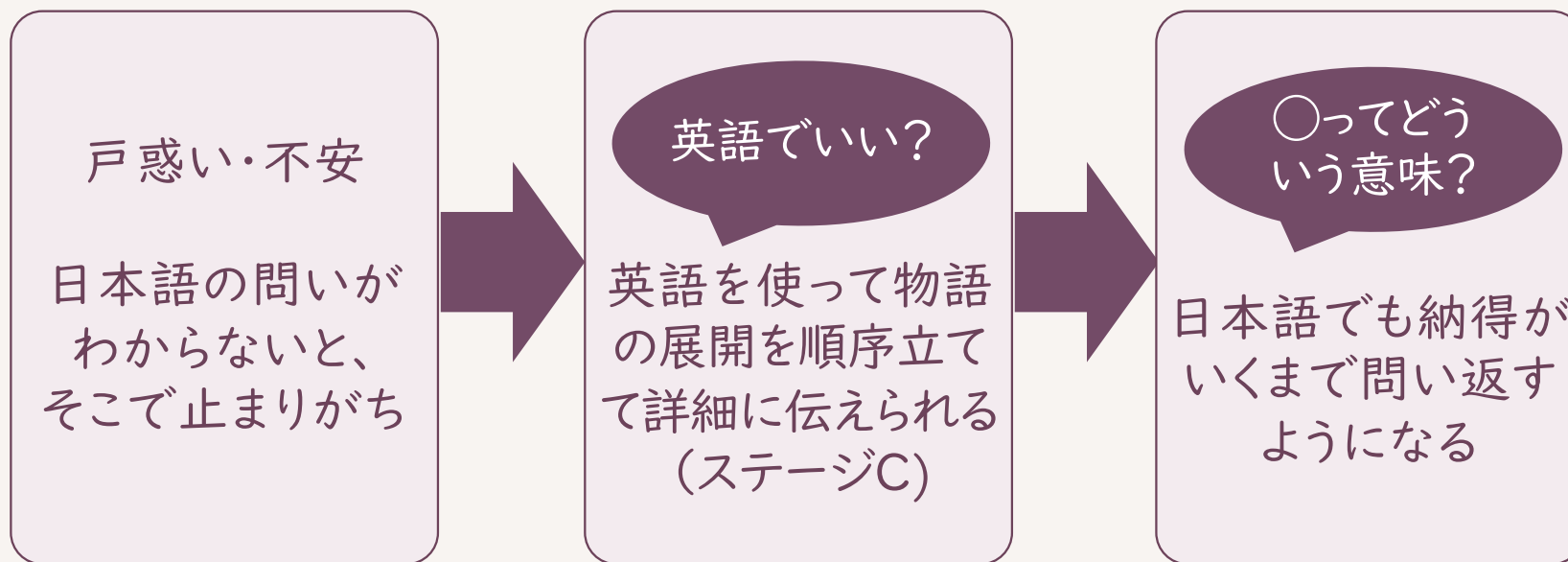
多言語P4C（マルチリンガル子ども哲学）の進め方

1. こどもも、大学生も、教員も「Pネーム」で呼び合う
2. 多言語でのゲーム（「○からはじまる言葉」「連想ゲーム」「漢字想像ゲーム」等）
3. 対話のきまりを【日本語→英語】で読む。

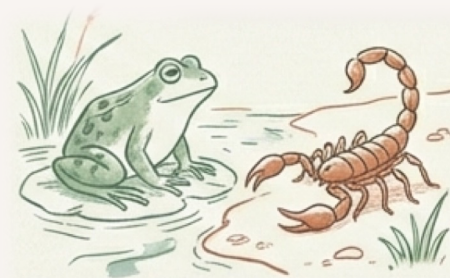
- 「わからない」といいいい。しつもんしよう。
- きいているだけでもOK。だまってもOK。でも、かんがえることをやめない。
- さいごまできく。ゆっくりまつ。
- じぶんのかんがえが かわることを たのしむ。

4. 動画を日本語で見る or 物語を【英語→日本語 or 日本語→英語】で読む。
5. 動画or物語の内容に関する問いを【日本語or英語】で大学生から投げかける。
6. 問いへのこどもの応答に大学生or教員が応答し、問い合い続ける。

実践の結果：こども(A)の変容



実践の結果：こども(A)の変容



【事例】

読み物： 寓話「カエルとサソリ」

テーマ： 他者を助けること、責任、関係性

Aの挑戦： 他者の立場になって考え、自分自身の倫理観を言語化

学生： もし、カエルだったら、サソリを助ける？

A： (考え、うなづく)

学生： どうして？

A： (考える)
(沈黙)

教員： カエルとサソリはともだちなのかな？

A： わからない

教員： ともだちじゃなかったら、助けない？

A： 友達、友達じゃない、関係ない。(サソリは)困ってる。困ってるから助ける。

学生： そうか。すごい。でも、サソリはさすかもしれないよ。

A： サソリ、家族のところに行きたいでしょ？ だから、助ける。

刺すかもしれないサソリを助ける行為の結果生じる
「リスク」と、困っているサソリを助きたい「良心」の間で
生まれるAの倫理的判断や応答性
→TLを活用し英語で事前に深く理解いたことが大きい

日本語の構造のみでは掴めない
Aの認知的、認識的側面

子どもの変容からの考察

- TLを活用したP4C
 - 多文化多言語のこどものバイリンガル/マルチリンガル・アイデンティティを肯定
 - 母語・日本語の両方を使ってこどもが問い続けようとする力を育むことに寄与
- P4Cの中で立ち上がってくるこどもの認知的・認識的側面
 - 低学年のこどもの場合も抽象的な事柄の理解を情動の変化と併せて複数言語で見取ろうとすることの意義が示唆

発達ステージA-C【イマココ～順序期】（「ことばの力のものさし」（文科省2025））
身近なことに関連した学習内容について理解し、簡単に、順序立てて説明できる

ステージA～Cでも、身近なことや経験したことを手がかりに、抽象的な事柄について、断片的な発話であっても、複数言語を使って因果関係を探ったり、考え問い続ける協働活動
→ 発達ステージD【因果期】への架け橋に

実践の結果：学生の変容（TL教育論を学ぶ前）

表6

| | |
|---|--|
| U | <ul style="list-style-type: none">• こどもが日本語で話せるようにするにはどうすればいいか?という意識だった。• こどもの母語を活用できる資源として捉えていなかった。 |
| X | <ul style="list-style-type: none">• それまでは日本語と英語であったりとか、凄く切り離して自分の中で考えてたかな。それぞれの言葉が、独立してるのかなって勝手に感じてた。• (ラオス語・タイ語を言語資源としてもつ自身の父親に対し) 父が日本語が話せるようになったらいい、と考えていた。 |
| Y | <ul style="list-style-type: none">• 「日本語能力をどう伸ばすか」という視点を、無意識のうちに中心に置いていた。• 対話は基本的に日本語で行われるものという前提があり、母語の使用は状況によっては控えられるもの、あるいは補助的なものとして無意識に位置づけていた。• 自身の母語である中国語を「できて当たり前もの」「日本で学ぶための前提条件」として捉えており、研究や学習において積極的に位置づけ直すことはほとんどなかった。 |

実践の結果：学生の変容（TL教育論を学んだ後）

〈Uの場合〉

すごい衝撃だった。
でも、当初は日本語以外を使うことに懸念

英語を使っていい環境で
Aがスイミーを生き生きと
語り始める姿を見て、
すごいと思った。

Bとの対話の中で、たまたま
お母さんが英語でフォロー
してくれて、BのTLコリエ
ンテが流れたという経験

TLの重要性
を実感

家族の言語資源を
その場で瞬時に活かせなかった
→ TLの解像度が低かった

それまでの自分の関わりでは、
こどもの力を低くみつめること
になっていたのではないかと

P4Cで起こる沈黙
→言語化するのが早い人が
主導権を握ってしまった

オンラインでのTLシフトは
たまたまできた。対面の時は、
TLシフトできなかった。

TLシフト、TLデザインのスキルの
獲得には時間がかかる。認知的
にも負荷がかかる

リスクへの
深い省み

TL教育論の
解像度が
上がった

実践の結果：学生の変容（TL教育論を学んだ後）

〈Xの場合〉

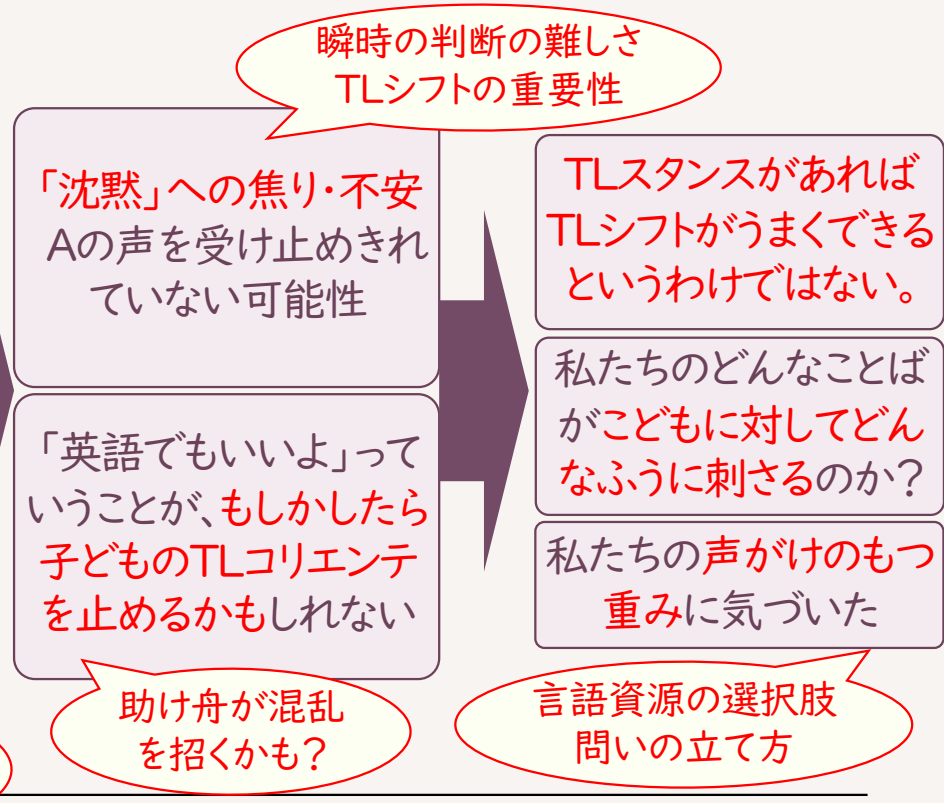
(タイ留学の時を回想)
タイ語と英語を両方使った方がどちらか1つの時よりも自分の伝えられることがすごく多くなったことを思い出した。「あー、自分もTLやってたんだな」って。

父の言語資源としてラオス語、タイ語を捉えるようになった。日常生活でも、それを意識するようになった。

(スイミーとかがまくんとカエルくんの時のAの様子)
きっとそれって別々の言葉で考えてるんじゃない、っていう気づきがあった

(TLを取り入れたことで)カエルとサソリの時もアリとキリギリスの時もAが日常的にそういうふうに考えてるんだなあって

困窮した人に対するAの応答性・道徳的判断が垣間見える経験



実践の結果：学生の変容（TL教育論を学んだ後）

TLデザインの重要性

〈Yの場合〉

ことばを固定された言語単位としてではなく、学習者が状況に応じて柔軟に使い分ける「**意味づくりの資源**」として捉える視点へと大きく転換

母語は単なる背景要因ではなく、**思考の深さや視点の多様性を支える重要な基盤**

（母語や他の言語の使用について）

日本語習得の前段階ではなく、**思考そのものを支え、他者と関わり、学びに参加するための中核的な力**

単なる「許可される行為」ではなく、**子ども自身が思考し、対話に参加するための正当な権利であるという認識へ**

TLスタンスの重要性を認識

母語は克服すべきものではなく、**学びとアイデンティティを支える資源**

支援とは「日本語を教えること」に限定されるのではなく、**学習者が持つ複数の言語資源をどのように学びの場を開いていくかを設計する行為と捉えるように**

対話の場を「日本語能力を示す場」ではなく、「**自分のことばで考え、表現する権利が保障された場**」として捉え直すように

自身が母語を持ち、それを保持したまま日本語で学び、研究しているという**経験そのものが、CLD児童の支援を考える上での大切な視点**になっている

学生の変容からの考察

【TL教育論を学ぶ前】

- 言語を単一言語主義的に捉え、非日本語母語話者の側の「日本語をどう伸ばすか」ということに意識が置かれる



【TL教育論の学び】×【こどもとの関わり】×【P4C】

- こどものもつ複数の言語を「資源」と捉えるようになっていった。
- TLコリエンテ（流れ）を捉えようとする意識（▶トランスランゲージング・レンズを用いるように）

TL教育論の理論的背景の理解
専門性の高まりの実感

ジレンマ

TLコリエンテ（流れ）に乗れない
こどもの力を見切れない葛藤

TLスタンスのみではこどもの声は引き出せないという認識
→ 問いの立て方、言語資源の選択のタイミング、沈黙の捉え直しを経て、
TLデザイン、TLシフトの技術と経験の積み重ねの必要性へと認識が変容

より高度な専門
性への意識化

学生の変容からの考察



【P4Cで学生が直面した葛藤・ジレンマ】

- 「沈黙」をどう捉えるか?
- TLシフトの瞬間瞬間の判断の難しさ
- ▶ 学生の未熟さゆえの結果とは言い切れない部分も。

こどもの思考を尊重しようとするがゆえに生じる不確定性の下で
営まれるケア的思考の表れではないか

今後の課題

- TLを活かしたP4Cの中で生まれるケア的思考
(例)
 - こどもがもつ複数の言語を「資源」であり、それを活用する言語実践をこどもの「権利」と捉える (▶TLスタンス)
 - こどもの言語資源を活かす学びの設計 (▶TLデザイン)
 - どんなテーマの読み物をどの言語でどの順番で、どのように読むか？
 - どのように対話を育むか？
 - こどもの思考の流れ (▶TLコリエンテ) を捉えられているか？
 - こどもの思考がスムーズに流れるよう言語実践を瞬時にケア (▶TLシフト)
- 多文化多言語のこどもの公正な教育におけるTLの役割とその教育に携わる人材育成を考える上で今後重要な課題となると考えられる。

引用文献

- 河野哲也 (2021) 『じぶんで考えじぶんで話せるこどもを育てる哲学レッスン 増補版』河出書房
- ガルシア, オフィーリア・イバラ, スザンナ・セルツァー, ケイト (著) 佐野愛子・中島和子 (監訳) (2024) 『トランスランゲージング・クラスルーム – 子どもたちの複数言語を活用した学校教師の実践』明石書店.
- 文部科学省 (2025) 「文化的言語的に多様な背景を持つ外国人児童生徒等のためのことばの発達と習得のものさし (略称「ことばの力のものさし)」」 URL: https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/1345413_00002.html (最終閲覧日:2025/12/28)
- リップマン, マシュー (著) 河野哲也・土屋陽介・村瀬智之 (監訳) (2014) 『探求の共同体 考えるための教室』玉川大学出版部.

P4C実践の素材

- ウォーリー, ピーター (著) 永井玲衣・小川泰治・古賀裕也・後藤美乃理・田中理紗・得居千照・西山溪・堀越耀介 (翻訳) (2023) 『もし友だちがロボットだったら? 哲学する教室のつくりかた 30の授業プラン』晶文社.
- えがしらみちこ / 子どもの権利・きもちプロジェクト 『ようこそこどものけんりのほん』白泉社.
- NHK for School 「Q~こどものための哲学~」 URL: https://www2.nhk.or.jp/archives/movies/?id=D0009043530_00000 (最終閲覧日:2026/1/21)
- Shell Silverstein (1998) *The Giving Tree*. 篠崎書林. シェル・シルバスタイン (著) 村上春樹 (訳) 『おおきな木』あすなろ書房
- ヨシタケシンスケ (2019) 『なんだろうなんだろう』光村図書出版.